

(牧師室より)

[ゆるしの秘跡]

将棋棋士の加藤一二三氏の『だから私は、神を信じる』を見ると氏がいかに熱心なクリスチャンであるか、しかも敬虔なカトリック信徒であるかがよくわかります。氏は1940年生れで受洗後50年になります。この中で「ゆるしの秘跡」について述べているところが興味深く思われました。それは「自分が犯したことをイエスさまの代理人である司祭に告白し、神さまのゆるしを乞う儀式です。欧米の映画には、キリスト教の信者が小さい部屋で格子越しに司祭に自分の罪を告白するシーンが時々登場しますね。あれがまさにゆるしの秘跡です。日本では『告解』、『懺悔』とも呼ばれます」。これは受洗後の罪についての扱いですが私達プロテスタントではこの制度はありません。それはルターが神に直接懺悔し赦しに与るとしたからなんですね。同じ宗教改革者でもカルヴァンは、長老(牧師)に告白しなければ赦しの確信を得られない人への助けとしては認めています。私達は個人の祈りで罪の懺悔をします。また礼拝では司式者の祈りに合わせて共に懺悔します。赦しは説教を通し、また聖餐に与ることにより与えられます。また牧師に懺悔して牧師がキリストの名において赦しを宣べることはあり得ます(ヨハネ20・23、Ⅱコリント2・10)。ですから牧師には守秘義務があります。制度にする、しないに関わらず罪を懺悔し、赦しを確信する—これは大事なことです。心が軽くされスッキリしますから。